
龍の逆鱗

銀狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の逆鱗

【Zコード】

Z0606Y

【作者名】

銀狼

【あらすじ】

小さな島国『大和』で忍となるために修行を積んできた少年、東龍斗。使いを頼まれて船旅に出たが、海上で嵐に遭ってしまう。気付いたとき、龍斗の前に現れたのは死んだと思われていた人物。辿り着いたのは、祖国の常識では計り知れない「異世界」だった。

第1話・四十九日明けて

季節は夏、山の木々は新緑に染まり、空には雲一つない青空が広がっている。東龍斗あずまりゅうとは一人山道を歩きながら、日光を透き通す木の葉などを何の気なしに眺めていた。島中を歩き始めたのは約一ヶ月前だが、その時とはすっかり景色が変わっている。時折聞こえる野鳥の声に、あの鳴き声はなんという鳥だったかと思いを馳せる。だが今回はその思考を遮られた。

「よう龍斗」

「……何だ、遠矢か」

立ち止まつた龍斗の前には一人の少年がいた。齡十五齡十五、龍斗と同じ年に生まれ、同じ道を志してきた友人の一人、富原遠矢みやはらとおや。突然声を掛けられたことで素早く身構えた龍斗だが、黒髪に茶色い目の相手を認識すると警戒を解いた。それを見た遠矢は苦笑した。

「ははは、相変わらずだなお前は。家もそうだけど、生糸、ていうのかな」

「当たり前だ。いつ何が敵になるか分からんからな。とはいっても月近くまともに動いてなかつたら流石に駄目だ。気付くのが遅れだし、気が散つてた」

ため息交じりに首を横に振る龍斗。それを見た遠矢も一つ息を吐いた。嘆息ではない。寧ろ安堵した様子である。

「安心した。龍誠殿りょうせいじんが亡くなつた後大分落ち込んでたからなあ。心配して損したぜ」

「そりやどうも。まあ四十九日も終わつたし、今日からまた修行を再開するつもりだ」

「……大丈夫か、本当に？」

心なしか暗い声色の返答に、遠矢が念を押す。

「大丈夫だよ、なんのための四十九日だ。じゃな、俺行くわ」
龍斗は笑いながらそう言つと山道を降りていった。後に残された

遠矢はその後ろ姿を見ながら咳く。

「……こっちだって忍を目指してゐる身だ。目が笑つてねえことくら
い分かるつてんだ馬鹿野郎」

龍斗の目を思い出しながら、それでも彼を追いかけることなく山
道を進んでいった。

龍斗の家は忍としてそれなりに優秀な家であつた。祖父の龍誠、
父の遼一もまた忍として働いていた。物心ついた時から忍に憧れ、
忍の道を志すのは自然なことだった。

山を下りた後、自分の家の前を通り過ぎて大通りに出た龍斗。町
の人々はいつものように商売をしていた。お客様は神様だ、という
精神で誰に対しても丁寧に、円滑に会話を交わしている。

（けどこれも、一度豹変したことがあつたな）

龍斗は思い出した。街行く人々の目は黒か茶色。だが龍斗はそ
のどちらでもない。一見すると黒に見えるのだが、近くでよく見ると
それは青みがかつた深い色、藍色であることが分かる。それは別に
問題ではなかつた。だが彼の母親の存在が問題だつたのだ。この街
にとつては、母が異質だつたのだ。

異国から流れ着いたという母はこの国にはない金髪、青い目を持
つていた。その後家族全員で村八分を受けた。人は異質を排除しよ
うとする。それが分からなかつた龍斗はただ悔しさに涙を滲ませた。
父と祖父の口論が記憶に残つてゐる。真剣を持つての死闘が繰り広
げられたことも覚えている。時間が経つて母という人間が理解され
ていくと村八分もなくなつた。

龍斗はいつの間にか左手で片目を押さえていることに気付いた。

軽く首を振つて歩き続け、目的地に到達する。

そこは修行場と呼ばれる場所で、何もない広場で何人も的人が手

合せを行つてゐるのが見える。それを横田に、龍斗は一つの小屋に辿り着いた。玄関先に立つてゐた人に名を名乗る。

「東龍斗です」

「おお、待つとつたぞ。この度はその

「もういいですよ、その挨拶。聞き飽きましたから」

「……そうか。なら早速じやが一つ頼まれてくれんか」

龍斗と話していた人物、藤堂源一は一つの手紙を取り出した。見た目はただの杖をついた老人だが、かつては忍の最高位にいたこともあるという人物である。師範として若き忍を育てる今もその力は衰えていない。杖もただの杖ではない。中には鋭利な刃が隠されているのだ。性格もそれに似たようなもので、穏やかで気さくな所もあるが、忍という道に関しては一切妥協を許さない。自然災害など致し方ない障害に阻まれた時も情を捨てて忍を辞めようと切り捨てる、厳格な性格である。そのふるいにかけられて忍になることを諦めた人間が多くいることを龍斗は認識していた。

「この手紙を御蔵島の時田さんに届けてほしい」

「分かりました。出来るだけ早く届けるようにします」

「ほつほつほ、まあそんな急ぎでもない。他所の島の様子でもゆつくり見てくるがいいさ。それが復帰第一号の修業じや

源一はそう言つて小屋へと消えていった。龍斗は首をかしげた。手紙の裏を見てみたり、日にすかしたりしてみるが、特に変わったところはない。

結論が出たのは龍斗が自分の家に帰つてからだつた。家にはもう誰もいない。その事実がきつかけだつた。

（そうか、この島を出て、他所を見て氣を晴らせと。藤堂さんらしい不器用なやり方だ）

口角の一端を上げながら龍斗は家に入った。

翌朝、龍斗は一人旅支度を整えて家を出た。いつもの格好に、父の形見である太刀、祖父の形見である脇差を身につけて誰もいない大通りを闊歩する。今はまだ日の出前、よほどのことがない限り人は起きていないことはない。左肩に担ぐ麻袋には最低限生活に必要なものを入れた。母が作ったこの袋は一重構造になつており、袋の中にさらに小さな袋が付けられていた。大きさがちょうどよかつたので手紙はそこに入れてある。路銀 旅に必要なお金のことだが、有り金全てを持つていくことにした。何時何でどれだけ必要になるか分からぬし、家に置いておいても得はない。寧ろ泥棒に盗られる心配がある。知らない間に盗られてしまふ、より自分で持つて賊に狙われる方がまだ救いがある。

（それに金は無くて困ることはあつても有つて困ることは……あるな、やっぱ）

歩く度に首を立てる腰辺りに田をやる龍斗。そこにつけられた巾着袋には金、銀、銅で作られた貨幣が入つている。ここ玲角島れいかくとう、これから向かう御藏島みくらじま、その間にある徳間島とくまじま以下数個の島からなる国『大和』で流通しているお金である。金が最高価値に定められて、るために物価が安定しやすいのだと誰かから聞いたことがある。それはいいのだが、問題が一つあつた。貨幣とはいえ金属は金属。持つ金額が増えれば増えるほど荷物が重くなってしまうのだ。

（まあいいか、ほんとに盗られるよりはましなんだから）

道は大通りから横道にそれ、森の中へと続いていく。草木が生えていないその道を進んでいくうちに、磯の香りが強くなってきた。やがて森を抜けると、そこには白い砂浜と、赤く染まり始めた朝焼けの空、そしてその光を反射し白い波を立てる大海原が画面いっぱ

いに広がった。龍斗はそこから左に移動していった。やがて大きな小屋と桟橋が見えてきた。龍斗は小屋の前に立ち、扉を数回叩いた。海に出るにはこここの貸船屋で舟を借りる必要があるのだ。

「はいよ……ああ、龍斗君かい」

眠い目をこすりながら戸を開けたのは、主人。巾着から銀貨一枚を取り出し男に言つ。

「御藏島まで行くから、出してもらえますか」

「へえ、そりやまた遠出だねえ。なら帆かけの方が良い……でも悪いな、金一、銀一になつちまうぜ」

「ん……まあいいですよ」

龍斗は巾着の中身を探り、金貨を探し出して主人に渡す。

「やつぱり舟は高いですね」

「まあな、他所の島に行くには、これが自力で泳ぐかしないと。それと原因はやつぱり野分と鮫だな。あれに出くわした舟がぶつ壊れたり、かなりの損傷受けたりで、もう修理代が馬鹿にならん」

神妙に頷く龍斗。実際彼が覚えているだけでもかなりの数の舟がその被害にやられている。一部が割れて沈没しかけていた時もある。見送つた船が木片と化して帰つてきた時もある。被害にあつのは舟だけではない。それに乗つっていた人間も、なんとか無事に帰つくる者、波に襲われ溺死した者、舟ごと行方不明になつたままの者もいる。その中には龍斗の親族や友人も含まれている。そして彼は今後そうなる可能性のある人物である。決して他人事ではないのだ。

桟橋に出て待つていると主人が舟を出してきた。中央には一本の柱が立つてあり、折りたたんだ白い布がその下にあつた。龍斗は主人と共に舟を後ろから押していき、海に浮かべて乗り込んだ。

「風があつたら帆を張つとけ。艤^るや櫂^{かい}で行くより楽だからな。何かあつたら近くの船屋に寄れ。舟つてのは組合で共有してゐるもんだからどこのどの舟でも一緒だ」

わかりました、と返事をして舟の後ろにある艤を漕ぎ始める龍斗。手を振つて見送ろうとした主人だが、手を挙げようとした瞬間

あることに気が付いて龍斗に叫ぶ。

「おい！！」

その声に反応した龍斗が振り返ると、何か光るもののが飛んでくるところだった。思わず掴みとったそれを開くと、龍斗の目は皿のように丸くなつた。思わず掴みとつたそれを開くと、龍斗の目は皿のように丸くなつた。思わず掴みとつたそれを開くと、龍斗の目は皿のように丸くなつた。

「その疑問を口にする前に、投げた本人が声を張り上げた。

「進水式代わりだ！！ 生きて帰つてこいよー！ 良い旅を！－！」

思わず笑みを浮かべた龍斗。大きく手を振つている主人に手を振り返し、龍斗はまた櫓を漕いだ。

いつの間にか空には白い雲が浮かんでいた。龍斗は人差し指を立てて睡をつけ、目線の高さに持つていった。風が当たるとそこだけ冷氣を感じる。こうして風向きを把握した龍斗は、次いで進行方向を確認した。出発した玲角島は後ろ、太陽は少し高度を上げたものまだ東にある。そして前方に小さく見えるは中継地点の徳間島。その島の船屋にこの舟を任せ陸地を移動、反対側の船屋でまた舟を借りる。そしてようやく御蔵島へとたどり着く。払ったお金は御蔵島までの往復にかかる料金である。いちいち支払いをしていつものだが、まとめて支払うと幾らかおまけしてくれる。組合員による証明証を見せればこの方法でも問題はない。その証明証は麻袋の中、手紙と同じ場所に大事にしまつてある。

龍斗は帆を張ることにした。航路に對して追い風という絶好の機会を逃すわけにはいかない。白い布が上がる、それまでよりも速い速度で進んでいった。龍斗はふと振り返り玲角島を見た。既にかなりの距離を進んでいたが、まだ島は視認出来た。一つ息を吐くと、心の中で島に語りかけた。

(暫く離れる。ま、すぐに戻るさ)

進行方向に間違いがないことを確認して、龍斗は舟に寝転がつた。

これが、龍斗が見る最後の故郷の姿であるとは知らずに……

第3話・極楽浄土か奈落の底か

何処だ、ここは……

龍斗は薄く目を開けた。視界がぼやけてはつきりせず、色しか認識できないでいた。だがその色も白一色しかない、と思つた瞬間に黄色い色が現れた。青い点が現れたと思うと、すぐに振り返つて何を叫ぶ。

(……ん?)

龍斗はそこで違和感に気付き、数回の瞬きをした。視界がはつきりした瞬間、龍斗は文字通り飛び起きた。その勢いのまま足裏をついて体を起こし大きく跳躍、着地と同時に片膝をついて振り返つた。突然のことに啞然とした様子の男女がそこにいた。藍色の鋭い目が一人を捉え即座に判断する。

(立つてゐる男は茶色の髪、特に武器は持つてない。座つてゐる女は口元に手を当ててゐる。髪は金で目は青い……ん? 青眼金髪?)

龍斗が眉を顰めたのと、新たな人間が入つてくるのとはほぼ同時だつた。

「目覚ましたつて!?

「ホントに!?

声の主に目を向けた龍斗は顔を認識した瞬間に驚愕した。普段は滅多に素の表情を見せない龍斗だったが、この時ばかりは違つた。「連、それに、霞……ああ、そういうことか。で、ここはどつちだ。極楽浄土か、奈落の底か」

一人納得する龍斗の言葉を聞いた二人は顔を見合わせる。その後しばらく二人の笑い声が部屋を占めることとなつた。

「いや悪かつたよ。あんな真剣な顔で言われたらさ」「目が覚めたら死んだと思つてた人間がいる。死んであの世行き

を考えて何が悪い」

「あーひどーい、あたしを勝手に殺さないでよー」

「大和じやもう死亡扱いになつてゐつづーの。行方不明になつてから何年経つたと思つてるんだ」「

氣分が落ち着いた龍斗は今自分が寝かされていた寝台に座り、後から入つてきた二人　鳥丸連からすまれんと齊藤霞さいとうかすみを相手に話をしていた。二人とも龍斗と同じ国で生まれ育つてきたが、何年も前に行方不明となり、国内では既に死亡したものと看做みなされていた。だが今こうして目の前で生きている。夢でないのは、傷む左足が証明していた。そのことを問うと連が丁寧に教えてくれた。

「龍斗はさ、舟に乗つて海を渡ろうとしたんだよね」

「ああ、そうだ」

「で、突然の嵐　野分に遭つた」

「ああ、そうだ」

「で、荒れ狂う波に襲われてゐつづに氣絶してしまい、気が付いたらここに流れ着いていた」

「ああ、そうなるな」

「俺たちも一緒なんだよ。普段なら全く問題なく渡れる航路を進んでいつてたのに、突然の野分、訳の分からぬ海流、進路の間違い、様々な原因を経てここに流れ着いた。そして助けられた」

「あたしもそうだよ、と。はい終了」

左足の包帯を取り換えていた霞が作業を終えて立ち上がった。

「悪い、ありがとな」

「どういたしまして、お兄ちゃん」

礼を言つた龍斗だったが、霞の返答を聞いて背筋に寒いものを感じた。

(「こいつ……あ、そうか、こいつもあの一派の一員だつたか」)

霞は悪戯心に満ちた笑顔でこちらを見ている。一方の連からは疑問の念がひしひしと伝わってくる。ちつと鋭く舌打ちしたところで横から白い手が伸びてきた。

「仲がいいのね3人とも。はい、どうぞ」

「あ、有難うござります」

それは最初から部屋にいた金髪青眼の女性だつた。白い小さな器を受け取ると、両手から温もりが伝わつてくる。湯気を立てている中身を見ると、同じく白い水のようなものが入つている。

「ホットミルクよ。体が温まるわ」

「ほつと……みるく?」

言葉に違和感を感じたが、他の一人は全く氣にしていない様子で中身を飲んでいる。龍斗もそれに倣つて器を口元に運んだ。

(……美味しい)

ほのかな甘みが口に広がり、熱が体の芯を通つていく感覚を味わう龍斗。そして、器の中身の正体にも気づいた。

「これ、牛乳か」

「そう、牛乳に砂糖を入れて温めてあるんだよ。大和にはないよねこつこつの」

霞が笑つて返してきた。ホットミルクを半分ほど飲んだ後、龍斗はあることに気付いた。左手の人差し指を親指に引っ掛け、手に持つた器の端を軽く弾くと、キンという澄んだ音が響いてきた。

「陶磁器の小さな器……これ、『コップ』てやつか?」

「正解よ、よく分かつたわね」

渡してくれた女性がそう言つた。龍斗は数秒目を閉じた。再び目を開けた時、彼の頭の中では氣が付いてから今までに得た情報が整理され始めていた。

(舟による難破、漂流。過去に同じように流された奴らの一部が生きてる。馴染みのない調理、陶磁器製の器コップ。何より……金髪青眼、母の言葉)

「そうか、此処が……母が元いた世界、異国か」

まったく無意識のうちに龍斗の口から結論がこぼれ出た。

だが龍斗には一つ疑問に残つたことがある。連や霞は答えを知つていそうなので率直に聞くことにした。

「ijoが異国なら言葉は通じないとあるんじゃないのか、確か「つる覚えの情報の真偽を確認する龍斗。今までの流れから考えて金髪青眼の女性は龍斗から見て異国の人間。そして大和の者と大和の言葉を用いて会話をしている。自分も聞いて受け答えしたのだからこれは紛れもない事実である。だが彼女以外はどうだろうか。もし方言のように言語の違いがあつたならどうすればいいのか。そう言つたところを聞いたのだ。

「ああ、それね。龍斗は聞いたことないか？ 今の大和に繋がる系

譜の国が遙か昔に全ての陸地を支配したっていう話」

「端的に言えば、それは事実でしたって言うことになるわね」

連の話を霞が締めた。連が言つたのは大和に伝わる有名な言い伝えのことだ。全ての陸を支配し、言葉も通貨も文字も、全てを統一したまさに天下一の英雄伝。最初聞いたときは眉唾物だつたが、ここにきて何年も過ごしている彼らがそう言つのなら事実だつたのだろう。彼らが嘘をつく利点もない。

「まあ文字は大和でも使う漢字ひらがな以外に、カタカナやアルファベットつてのがこちら独自の文字としてあるんだけど。あと数字かな、漢数字じゃなくてアラビア数字使つよ」

龍斗は頷いた。幼い頃から異国出身の母によく言われていたことである。

「分かつた。意思疎通については問題ないんだな。じゃあ次に……」

第4話・家族の形見、忍の名乗り

「じゃあ次に、俺の荷物は？」

「ああ、そここのテーブルの上にある。ちよい待つてな」連が椅子から立ち上がり、寝台の横にあつた棚のような物の所へ移動する。腰くらいの高さがあるそれの上に麻袋が置いてあつた。その台の横には太刀が立てかけてあるのも見える。そう、父の形見として持つてきたあの太刀である。

連が戻ってきた。椅子に座りながら龍斗に袋を渡す。

「はい、これ。一応中身確認して」

龍斗は言葉が終わる前に袋を開け、中身を確認していた。着替えの服、金の入つた巾着袋、非常食の兵糧丸、中にあるのは龍斗が入れたものと同じ。極めつけは中にあるもう一つの小さな袋。

「お、この麻袋、ポケット付いてたのか」

どうやらポケットと言つらしい。龍斗はそのポケットから手紙と証明証を取り出した。手紙に書いてある差出人の名前は藤堂源一、証明証にもあの貸船屋の主人の名前が書いてあつた。何より、龍斗にとつて最も大切な物を見つけることができた。

「ああ、良かつた……爺さん、母さん、美夜」

手に取つたのは形見の品。祖父が持ち歩いていた脇差。妹の美夜が愛用していた簪。かんざし母が首に卷いていた細い鎖。金貨のような色で輪になつており、真ん中辺りには貝を象つた飾りがついている。

「あら、ネックレスなんて持つてるの？」

「ん、どれどれ。おお、本当だ。異国にもあつたのかい？」

金髪の女性と茶髪の男性が母の形見を見てそう言つた。

「これ、ネックレスつていうんですか？　いや、大和にはこんなものはありませんよ」

「じゃあなんで？」

男性が首を傾げた。存在しないはずのものを何故持つているのか。

当然の疑問である。

「母が持つてたんです。ここからは俺の想像ですが……恐らく母は元々こちら側の人間だった。だから、こっちにしかないものを持っていた。こっちの知識も知つていた。多分俺らとは逆に、こっちから大和へ流されたんだ。で、父さんと結婚して俺が誕生、そんなとこだな。それと連、霞が流された後ずっとこっちで暮らしていた事を踏まえると……」

注目する四人の顔を一瞥し、龍斗はため息をついた。

「やっぱ、大和には戻れないんだろうなあ」

最後の推量に連が言葉を返した。

「多分、それであつてると思うよ。実際こっちじゃ金髪青眼の人は多いし。ただ一つだけ訂正。確かにこっちから向こうに帰るのはほぼ無理だけど、向こうからこっちに来るのは案外難しい話じゃない」

「……どういうことだ？」

龍斗の目は連を捉えた。続きの言葉に耳を傾ける。

「あの辺には独特的な海流があつてね。トリトン海流っていうんだけど、その流れの方向が大和からこっちに向かつて大きな渦を巻くようになつて流れているのさ。それに乗つて上手く離れられればこっちに辿り着くことができる。但し、あまりに深いところに乗つてしまふと渦から逃れられなくなつて結末は沈没しかない。そして流れは一方通行だからこっちから大和方向へは行けない。極稀に別の海流とぶつかつて流れが止まるっていう話もあるけど、それが起こるのは何百年に一回とか言われているし、都市伝説みたいなもんだと思つた。けど」

「その何百年かに一回の海流に乗つて、母さんが大和に來たと考えれば辻褄は合う、か。都合も運もあつたもんじやねえな」

いつ発生するか分からぬ海流に偶然遭遇し、異国の者を受け入れる父に出会う。奇跡としか言いようがない、と龍斗は思った。

「でも東君、海流に乗つてきちゃつたんだよね。きっとご家族も今

頃心配して

「

「ばっ、おい！！」

霞の言葉を聞いて慌てて止めに入った連。だが話の肝心な部分は既に言つてしまつてゐる。龍斗は苦笑した。その表情はどんく陰りが見える。

「いいよ、連。隠したつて仕方ない。去年のことだから、お前はまだいたけど、その前にもう霞はいなかつたからな。家族は死んだよ。父、母、妹は土砂崩れに巻き込まれて、爺さんも一ヶ月ほど前、老衰で亡くなつた」

「あ……ごめん……」

「マジかよ、龍誠殿まで……」

部屋を沈黙が支配した。見知らぬ男女も家族の死という話題で言葉を失つてゐる様子。

「あ、でも、そう、だから俺は大和にはもう未練はない。帰つたところで何にもないしな。むしろこっちに来て良かつたかもしれん。心機一転だな」

その笑顔は大和にいた時、富原遠矢に見せた顔と同じだつた。顔から相手の心情を読むという忍の修行を積んでいた霞だけではなく、その修行をしていない連や男女にも龍斗の本心は伝わつてしまつてゐる。空元氣は部屋の空気をさらに空しくさせるという結果に終わった。

その後暫くして、連、霞は部屋を出でていつた。ふと見ると、頭上に見える壁の一部に穴が開いており、そこから茜色の光が部屋の中に差し込んでいた。この家の主であるといつて一人組もいつの間にか部屋を出でていた。

龍斗は一人寝台の上で仰向けになつてゐた。だがその目はすぐそこにある天井を見てはいない。

（何やかんや言つても、俺はこっちの世界のことを知らない。明日からその辺を学んでいくしかないな）

扉を叩く音がした。はい、と返事をすると金髪の女性と茶髪の男性が入ってきた。女性が両手で運んできたものをテーブルに置いた。どうやら食事のようだ。体を起こし、寝台から足を下ろして座る龍斗。

「はいどうぞ。あなたの分の夕食。ちゃんと食べないと回復は遅くなるわよ」

「すみません、色々世話になってしまって」

「はは、構わないよ。困ったときはお互い様、だつけ。そう言つんだろ、ヤマトでは」

男性の方が笑いながら言つた。一瞬龍斗は目を見張つたが、すぐ元に戻した。考えてみれば自分が来る前から何人もの大和人が流れ着いていることだろう。言い回しが伝わっていても何ら不思議ではない。

「有難うござります。えつと……」

お礼を言おうとしてはたと気づいた。この二人の存在を認識してからかなり時間が経つたが、一度も名前を聞いていない。そのことに気付いた男性は申し訳ないといった様子で頭を搔いた。

「あ、すまない。あまりに楽しく会話してたもんだから、口をはさめなくてね。僕はトマス・デイビス。トマスが名前で、デイビスが名字ね。年は42歳だよ」

「私はベラス・デイビス。この人の妻よ。年は……あまり言いたくないけど34歳。よろしくね」

龍斗は素直に驚いた。見た目だけの判断では龍斗はもっと若いと思っていたからだ。しかし年齢判断は特に重要なことではないし、元より外すことの方が多い。なので今回も龍斗は判断の間違いを気にしなかった。

龍斗は立ち上がり、初めて男女を見た時と同じように片膝をついた。元々左足を立てる癖がついているので、体重を右足にかけると痛みはさほど感じない。正座や立礼も知っているが、足への負担を考えればこっちの方がいい。それにこちらでの礼儀はほとんど知ら

ない。故に自分が一番よく理解している忍の礼儀を選択したのだ。
「東龍斗……いや、リュウト・アズマ、齡十五。以後宜しくお願い
申し上げます」

木製の扉を開け放つと、そこは異世界であった。勿論比喩的表現もちろんではある。龍斗は海を渡つただけで世界を渡つたわけではない。だが目の前に広がる景色は、元いた大和と比較するとあまりにも違っていたのだ。

快晴の空の下、雲を全て大地に引きずり下ろしたかのように街が白い。龍斗は2～3段の階段を下りた。足元を見てみると床も地面が露出せず、何かが敷かれてやはり白くなっている。降りきつたところで後ろを振り返る。今しがた龍斗が出てきた建物も例外なく白かった。

そうして建物の壁を見ているとき、龍斗の第六感が何かの到来を知らせた。すかさずその気配の居所を探る。忍として生きるためにはどんな些細な変化でも見落としてはならない、その教えが身に染みているのだ。

（2人、1人は軽く走ってきてるか。多分……）

「霞だろ」

すぐ後ろにまで来た気配に、振り返らないままそう言った。気配の主はそれを聞いて身震いした。

「お、おはよう東君、な、なんで分かったの？」

「お前も忍目指してたんなら分かるだろ、つと」

言いながら振り返った龍斗は、霞が着ている服に驚き言葉を詰まらせた。桜の花のような色の袖が短い上着、足を見ると白い袴のようものをはいているが、その長さはかなり短く、膝まであるかないかというところ。履物も草履ではない。栗のような色をして、足全体を覆うような作りとなつていて。

そうして観察しているうちに、さつき感じた内のもう一つの気配がすぐ傍まで近づいてきた。龍斗はまた姿を確認することなく正体を言い当てる。

「遅かつたな連」

「おつ、いや、霞が勝手に走つてつただけだよ。後ろ向いてたから
脅かそうってな」

「だと思つた。脅かすのなら成功してるぜ、つと……お彼らのその
格好で」

霞の向こうにいる連に目を向け、またその格好に言葉を詰まらせ
る。連の格好は霞の色違いとも見える青い半袖の上着、下は一本の
筒に足を通す感じの物をはいている。因みに色は黄土をかなり薄く
したような色だつた。昨日会つた時には全く気付かなかつた、とい
うより格好にまで気が回つていなかつた。

「ああ、そうか。この上着はシャツ。下にはしているのはズボン」
「あたしがはいてるのはスカートだよ」

聞けばこちらではこの格好が普通なのだといつ。異国の神秘だと
龍斗は思う。だが今はそれを学んでいかなければならない。目的
地に向かう間、取り敢えず龍斗は根本的なところから聞くことにし
た。

「そういうや昨日散々こつちこつちて言つてたけど、こいつて何処な
んだ？」

すると連は少し意外そうな顔をして口を開いた。

「小母さんから聞いてないのか。ここはランドレイク大陸つて名前
だよ。文字通り、大和とは比べ物にならないほど大きい陸なんだ」
「その中で最も東に位置する、つまり大和に一番近いのがここ、『
商業都市國家オリジア』だよ」

途中から霞が説明に加わつた。龍斗は記憶を辿つてみたが、母か
ら大陸の名前を聞いた覚えは無かつた。気を取り直して次の質問に
映ることにした。

「やけに白い街だけど、これ建築資材は何だ？ 同じものが足元に
も敷いてあるし」

「大陸の家は大抵が石造りだよ。木製の家もあるけど、大和にあつたような茅葺き、瓦屋根、漆喰とかは無い」

「敷いてあるのも石を加工したものだよ。その町の中で重要な道は大抵こうなってるね。例えば王様の住む城に続く街道とか。あ、ここには王様はいないよ。ここは商人達が統治してるから」

「へえ、商人がね」

「それもこれもここに経済の大事な拠点があるから……あ、着いたよ。ここ」

三人は石畳の街道の終着地点に来ていた。そこにあつたのは他の建物とは比べ物にならない程大きな建物。ただ大きいだけではなく、所々に曲線を描くように石が並べられていたり、壁石の表面が綺麗に磨かれていたりとかなり手の込んだ造りがあり、この街の象徴ともいえる存在感を放っていた。その荘厳さに思わず啞然とした龍斗だつたが、入口前の屋根を支える柱に気付いた。

「なあ、あの柱はなんで赤いんだ？」

「ああ、あれは煉瓦っていうの。土を焼き固めて作ったものだよ」霞の情報によると、石の代わりに煉瓦を使って建てられた家もあるとのこと。その説明の後、霞は入口の上を指さした。龍斗もその方向に目を向ける。

「あれが銀行の印。^{マーク}黄色い大きな円に模様、つまり金貨を表しているの。で、その下にアルファベットで BANK つて書いてある。分かつた？」

「なるほど、絵で何の店か分かるのか。中々便利だな」「ここで連が気になつたことを口にする。

「そう言えば龍斗、アルファベットの綴り読めるのか？」

「母さんが大陸の人間だったからな。小さい時から読み方と文字くらいは教わつてた。読みは自信がないけど……左からブ・ア・ン・ク、でバンクだな。なんとなく分かる」

なら大丈夫だ、と連は笑みを浮かべた。彼は扉の持ち手に手を掛けると、ゆっくりと押して中に入つていく。龍斗、霞もそれに続い

て銀行の中に入った。

中の様子を見ると改めてその広さを思い知らされた。壁際には5人が一度に座れるほどの長椅子が所々に置かれている。真ん中には木の台を横に長くしたようなものが3辺を囲い、その内側では異様に同じ格好をした男女が客の応対をしていた。

「空いてるカウンターは……あつた。行こう、東君」

霞に腕を引っ張られながらカウンターの一角に立つた龍斗。向かいにいた黒い上着の女性が事務的な声で応対した。

「いらっしゃいませ。本日はどのようなご用件でしょうか？」

無表情で眼鏡の奥から睨むような視線を向けられた龍斗。だが龍斗にはその質問に対する答えを持つていない。お金を預けるという目的は伝えられているものの、具体的に何をすればいいのかまでは聞かされていないのだ。

助け舟を出したのは連だつた。

「こいつの口座を新しく作りたい。今までに利用経験はない

「かしこまりました。少々お待ちください」

どうやらこれが目的らしかった。去り際に、

「後は向こうの言つようにしてね。預金を忘れずに」

と耳打ちしていった。連に向けた視線を受付係に戻すと、ちょうど一枚の紙を出してきたところだった。

「ではまず、こちらの欄にお名前と年齢をお願いします」

龍斗は一本の鳥羽を受け取った。いつの間にか台の上には透明な容器と、金属のような光沢をもつ薄い板が置いてあった。中には黒い墨のよがなものが入っている。

（墨と筆、か？）

その前提をもつて龍斗は羽の先を液体につけた。垂れないよう容器の端で余分を落とし、板に『東龍斗 15』と書いた。年齢は漢数字で書こうとしたのを寸での所で思い留まつた。板を見せると

受付係は文字を確認し、再び龍斗に返した。

「申し訳ありませんが、漢字名の場合はフリガナをお願いします。読み方が特殊な場合などありますので」

納得した龍斗は漢字の上に『アズマ リュウト』と付け加えた。自分の名字、東と書いて『ヒガシ』ではなく『アズマ』と読ませるのは人名地名だけの特殊な使い方だからだ。

もう一度提出すると、

「アズマ リュウト様ですね」

と確認が入り、返却されることはなかつた。続いて彼女が出してきたのは針山と奇妙な水晶。水晶の中では黒い砂のような粒が、水に流れるように渦巻いている。針山から一本の針を抜き、受付係が言つ。

「では、リュウト様の血を提供して頂きますので、手を出して頂けますか」

「血、ですか？」

思わず聞き返してしまつた龍斗。彼女は至つて平静な声で説明する。

「はい。大陸全土のお金の動きを管理する場所なので、銀行と契約者の間には信用がなければなりません。その信用のために、血液を用いた契約を行います。銀行側は預かつたお金を責任を持って管理すること、及び必要の際には融資、即ち銀行のお金をリュウト様にお貸しすることをお約束します。リュウト様にはその代償として、通貨の価値を疑わないこと、銀行を疑わないこと、また融資を受けられた場合は、定められた期限までに借りた金額に加え、その1割に当たる額を利息として支払うことが求められます」

龍斗は左手を出した。失礼します、と断つた彼女が人差し指に針を刺す。一瞬の痛みの後に出でてきた赤い液体を謎の板と水晶に垂らす。すると、板が血を吸収していいるのか赤い円の範囲がみるみるうちに小さくなり、とうとう完全に無くなつてしまつた。同時に板が変色し、薄く緑がかつた色になつた。水晶の方は吸収される様子が

顕著だつた。黒い粒子が渦巻く中に赤い血の粒子が混ざり合ひ、一瞬だけ白く光つた。その光が消えると、元の黒い渦に戻り、赤は何処にも見当たらなくなつた。

「これで契約は完了となります。お疲れ様でした」

指先に包帯を巻いた後、受付係は事務的な声でそう言つた。続いて注意事項を述べていく彼女。

「融資を受けた後、一定期間以内にお金の返済と利子の支払いを済ませなかつた場合、銀行口座は閉鎖されます。現金取引以外では一切お金を動かすことは出来なくなりますのでご了承ください」

「現金以外で支払できるんですか？」

「はい。基本的にはカード払いが主流となります。これはリュウト様が物を買つた場合、銀行に預けられているリュウト様のお金が、相手の銀行口座に移動するというものです。リュウト様から見ると、数字が増減するだけとなりますが、きちんとお金は動いています。但し商人の中には現金取引しか受け付けないという方もいらっしゃいますので、幾らかは現金をお持ちになつた方がいいでしょう」「どうやら大陸ではこの金属板 カードを使って支払をするのが主流らしい。感心しながらカードを眺めていると、突然手中にあつたはずのカードが消えた。

「……あの、カード消えちゃいましたけど」

「カードはリュウト様の体内に保管されます。支払いなどでカードを出す場合は『マイカード・オープン』と唱えることで出すことが出来ます。逆にしまう場合は『クローズ』です。またこのカードは身分証明証の役割も持つています」

龍斗は試しに『マイカード・オープン』と唱えてみた。広げていた左手の上で光が弾け、先程のカードが出現した。そのことに感心していた龍斗は、次の用件を思い出し、慌てて受付係に告げる。

「預金ってどうするんですか」

「預金ですね。では、今お持ちの硬貨を預けたい分だけこちらにお渡しください」

龍斗は麻袋の中からお金の入った巾着袋4つを取り出し、自分の腰につけていたものも外してカウンターの上に置く。と、ここで龍斗は説明の一端を思い出す。

「確かに現金も幾らかは持つてた方がいいんですね」

「はい」

即答だった。それを踏まえた龍斗は巾着の中身を幾らか整理した。それを終えた上で改めてお金を受けた。巾着袋を次々とだす龍斗に驚いていた受付係だったが、声を掛けられるとすぐに元の表情に戻つた。流石のプロ根性というべきか。

「では預金金額をお知らせいたしますので、少々お待ちください」しばらくして、眼鏡の受付係が戻ってきた。その表情はさつき会つた時と違い、強張つていて見えた。少々震える声で彼女が言った。

「ええと、リュウト様の預金金額ですが、10ドルク銅貨7546枚、10000ドルク銀貨639枚、10万ドルク金貨87枚、合計で…941万4460ドルク、です」

第7話・銀行帰りの会話

「……にしても1000万近い財産つて凄いね
「いいなーお金持ちー。ねえねえ、100万くらい頂戴よ」

「誰がやるかよ、自力で稼げ」

銀行を出た龍斗達3人は街の中を散歩していた。百聞は一見に如かず。実際に目で見ながら説明を聞いた方が覚えやすいし、地理的なことも把握できる。更に龍斗は霞、連と会話をする中で大陸の言葉を覚えるようにしていた。元々他人よりも記憶力が良いので、一度さらりと説明されただけでも大分覚えることが出来た。会話が続くなつちに話すことが無くなり、今は銀行でのこと、お金のことについてが話題となっていた。

龍斗に金を無心して断られた霞は頬を膨らませていたが、ふとあることに気付いた。

「そういえばさ、東君はなんであんなにお金持つてきてたの？」

「ああ。うちは俺以外全員死んだからな。大半は葬式の時にもらつた香典だ。最初は泥棒に盗られるよりカマシだと思って持つてたんだが、舟を出した後に気付いてな。香典返しにお土産買つて帰るつもりだつた」

再び家族の死に抵触してしまった霞はしゅんとなり、「あんと呴いた。連はそれを聞いて湧いた疑問をぶつけることにした。確かに軽んじて良い話ではないが、当の本人が乗り越えようとしているのだ。その気持ちを尊重することである。

「でも香典にしてもちよつと多すぎじゃないか？」

「一つは罪悪感だらう。2人とも知ってるだろ、うちが一度村八分にされたの。解消されたけどやつぱ申し訳ないつて気持ちから多めにしたんじやないかね。もう一つはよく知らないけど爺さんがお偉いさんに重用されてたことだらう」「なるほどねえ」

「ところで俺も疑問に思うことがあるんだが」

お金の話題が続いたことで、すっかり忘れていた疑問を思い出した龍斗。

「ドルクが金の単位なのは分かる。でも銅貨が100、銀貨が1000、金貨が10万つていう値段設定は何だ？ 今ひとつわからないんだが」

「それはね、大和と違つて硬貨 자체にお金としての価値が無いからだよ」

霞が答えてくれたのだが、あまりにあつさりしすぎで今一つわからぬ。同じことを思った連が補足説明する。

「つまり大陸ではあればただの金属の塊と見て値段を決めているのさ。だから1グラム当たり何ドルクつていう決め方。ただ、元々お金として使うために作られているから一枚一枚価値が違うと意味がない。つまり硬貨はどれも同じ量の金属で作られていることになる。同じ量ということはどれも重さが同じだから、結局貨幣は値段が安定しちゃうんだよね。……で、安定しているからまだ取引にも使えるわけだ」

「ただの金属として、か。もう一つ……これは銀行への信頼に触れちまうけど……あれ大丈夫なのか？ 例えばここが他所の国に襲われたりしたらやばい、というか今だつて狙つてるとこありそうだな。何せ大陸中の金が集まつてるわけだし」

「ははっ、流石は忍、いいとこに気が付くな。それについては本当に大丈夫なんだ。端的に言えば大陸にある全ての国は銀行の融資を受けている、つまりは銀行にあるから何処も銀行に頭が上がらない。お金のほとんどが銀行にあるから何処も銀行に頭が上がらない。もしオリジアに危害を加えようとする国があつたら即座に経済制裁が加えられる。お金を一切動かせなくなるから国が機能しなくなる

ね」

「国が自力で大金を動かすのは大変そうだな……国にとつても利益が無いのか」

「あ、それと銀行の運営とオリジアの統治は商人ギルドがやつてゐる。ギルドは何処の国にも属さない独立した組織。それにオリジアは念のために全ての国と不可侵条約を結んでる、だから兵力が無くても国がやつていけるんだよね」

この日龍斗は度量衡の単位、店の看板、お金についてのあれこれを学んだ。それに加え、龍斗は新しく服を調達した。龍斗が着ているのは未だ大和から持つてきた着物に袴。大和では当たり前の格好なのだが、大陸には無い服装のため街を歩けば嫌でも目立つてしまう。人の注目を集めることを嫌う龍斗としては一番に避けたいことだつた。まだ少し抵抗があるが、連や霞曰く「そのうち慣れる」とのことだつた。

太陽が地平線に沈む頃、2人と別れた龍斗はデイビス夫妻の家に戻つた。扉を引くと昼間かと思うほどに明るい光と喧騒が龍斗を迎える。デイビス夫妻の家は旅亭を経営していた。昼間は開店休業みたいなものだが、夜になれば食堂は酒場となり、連日酒飲みがわいわいがやがや騒ぎ立てる。そして酔いつぶれた客に追加料金で寝床を提供したのが旅亭の始まりらしい。やがては最初から宿泊を目的とする客も現れ、今のスタイルが定着していったのだとトマスは語つた。龍斗はそうして客に提供する部屋の一つを化してもらつていた。

食事は基本的に食堂で行う。龍斗は騒ぎの中心を外れるように、端の方のテーブルに座つた。

龍斗がランドレイク大陸に漂流してから1ヶ月が過ぎた。この間龍斗は特に何をするということもなく時間を過ごしていた。否、実際には何をすればいいのか分からなかつたと言つた方が正しい。霞も連もこのオリジアで仕事を見つけ働いていた。だが龍斗はそれらの職に就きたいとは思わなかつた。かといってこのままディビス夫妻の所で厄介になつてはいるわけにはいかない。なら旅亭で働くか。その選択も龍斗には出来なかつた。

何せ最近まで龍斗は忍になることを目標としていた。忍とは影なる者。諜報や暗殺、破壊工作、情報操作を生業とするが故に、その存在は表沙汰には出来ない。龍斗は15歳、既にそういう任務を任せられ、遂行していた。その中には当然の如く暗殺　人を殺めるものも含まれている。

連は龍斗と一緒に基礎体力の鍛錬をした時期がある。だが連は忍になるためにしてはいたわけでなく、実家の空手道場を継ぐためだつた。無論殺人の経験など皆無である。

一方霞は女忍者　俗に言うくノ一になることを目標としていた。龍斗、連と同い年で龍斗と同じ忍の道を進んでいたが、決定的に違うのは3年前に行方不明となつたこと。この時点で彼女は11歳。忍の任務が与えられるのは12歳からなので、彼女はまだ忍として動いたことが一度もない。即ち、人を殺めた経験がない。

（そう、俺の手は既に何度も血潮に濡れている。そんな俺が一般人としてのうのうと暮らしていけるはずがない。今更……道は引き返せない）

龍斗は2人が羨ましかつた。血の穢れを知らず、自分の道を進んで行けたのだから。

そんなある日、龍斗は街の商店で大陸の地図を見つけた。そのまゝ何の気なしに購入し、旅亭に戻った。衝動買いと言つても過言ではないかもしない。食事の後落ち着いた時に改めて見ると、何故これを買ったのだろうと自分で不思議に思つたほどである。値段は1枚3万ドルク。旅亭の宿泊料が一泊2食付で2000ドルク、林檎1個が100ドルクということなので、かなり高価な買い物である。にもかかわらず使いようがない。なんという無駄遣いだろうか。だがこの地図を手にした時から、龍斗の心境に変化が起きたのもまた確かだつた。部屋にいるときは地図を見て時間を潰すようになつていた。地図の何を見るのか、そして何を思うのかは大体いつも同じだつた。

龍斗の視線はまず地図の右端、つまりは東端に向かう。そこにあるのは様々な形の島が南北に長く連なつてゐる様子。その横にはタツノ列島という文字が書いてあるが、タツノ列島よりも『大和』の方が龍斗にとつては馴染みがあつた。

（大きめの島が上から順に玲角島、徳間島、御蔵島。更に数個の島を合わせて大和か。……けつこう広いと思つてたが、小さいな。で、これに乗つて西へと）

龍斗の視線はタツノ列島から左側へと進んでいった。海には大きな渦が描かれているが、あまりの大きさに紙から切れてしまつてゐる。渦の中心に書いてある『トリトン海流』から更に左、『ランドレイク大陸』で目を止めた龍斗は母から聞いた言葉を思い出す。

「私が生まれ育つたのはとても大きな陸地だつた。世界はここだけじゃない」

それはぽつりと呟く独り言のようなものだつたが、龍斗の耳に強く残つていた。そしてそれは、大陸に流れ着いた今、龍斗が思うことでもあつた。

（井の中の蛙大海を知らず、か）

龍斗は自分が今いる所、『オリジジア』と書かれた場所に目を向けた。街の様子は非常に賑やかで、かつて龍斗が住んでいた玲角島よ

りも広い面積を持つが、それでも竜の尾の一部でしかない。つまりまだ龍斗は大陸の中のごく一部しか知らないのだ。

（どうせなら、もつと大陸を知りたい。知識は多い方がいい。無くて困ることはあってもあって困ることはない）

最終的に龍斗はそう考えるようになった。

そして龍斗はついに決意した。自分の進む道を定めた。多少迷いはあるものの、自分が思う条件を満たしている職業は他になかった。（冒険者、か。正直気乗りはしないが……今まで培ってきた戦う力を失うのは俺には出来ない。どうせなら縛られずに生きていきたい。なら、この道しかないか）

この大陸には職業ギルドといつものがあり、何か職に就きたい場合はそれに所属するのが一般的である。だが、大抵のギルドは加入に際して厳しい条件が課される。

例えば銀行の経営も行つ商人ギルドでは、お金の計算はもちろん社会経済についての知識も必要となる。それらを問うための筆記試験に合格しなければギルドに入ることは認められない。

例えば鍛冶屋ギルドでは、親方と呼ばれる中堅の職人の下で何年も下働きを経験した後、実技試験を受け合格しなければならない。

それに比べ冒険者ギルドには加入条件が一切無かつた。その理由は至極簡単、冒険者の世界は完全な実力主義だからである。力が無ければ生き残れない。常に死と隣り合わせと言つていい世界。だが逆に言えば、力量さえあれば任務を次々こなして荒稼ぎすることが出来る。それ故に冒険者という職業は大陸で最も人気のある職業だった。

更にギルドは、全ての国から独立した組織である。商人ギルドはオリジアという拠点を持つ例外的なものだが、承認が得られれば何処の国で商売をしても構わない。鍛冶屋もまた然り。冒険者では、関所を通る時の通行料が半額になる。それも決め手の一つとなつた。

思い立つたが吉日と、龍斗はすぐに冒険者ギルドに行き登録を済ませた。ややこしい手続きが必要なのではと内心不安だったが、カードを水晶にかざすだけで登録は完了した。だが龍斗にはもう一つ決意したことがある。

第8話・地図と決意（後書き）

ちょっと焦ったかな……

ハウ オ ル ズ

素人の拙い作品ですが感想など頂けると有難いです。

第9話・雁は発つ

『忍びても 景色晴れぬと 雁は発つ 跡は濁れど 情けは無用』

そう書かれた紙を囲うように座る4人の人間がいた。皆がその紙に書かれた文句を見つめ、眉にしわを寄せていた。そのうちの1人、ベラスが金髪を振り乱した。

「全然分からないわ。何なの、これ」

その隣にいた茶髪の男性、トマスもベラスに倣つて首を振った。肩をすくめ、両手を上に向けるおまけ付きである。

「僕もお手上げだ。こんなのは見たことない。……君らはどうだい？」

彼の視線は黒髪の少年少女、連と霞に向けられた。同じ大和出身の彼らなら、何か分かるかもしぬないと思つたからだ。その声に反応した連が顔を上げた。

「あ、そうか。お2人は知らなくて当然ですね」

そう前置きしてから説明を始める連。

「これは俳句、じゃないな、短歌つていうものです。美しい景色を見た感動とか、自分の気持ちを誰かに伝えたいときとかに詠む……まあ、詩みたいなものですよ。ただ、単なる詩と違つていろいろ制限があるんですけど」

「制限？」

聞き返してきたベラスに、連は答えた。

「ええ。俳句だと五七五の計十七音、短歌はそれに七七を加えた計三十一音で全てを表現するんですよ」

「へえ、東洋の神妙だね。それで、意味は？」

「んとね、『いくら我慢して待つても、空の景色は晴れにならず曇つて』いる。だから渡り鳥は飛び立つていく』前半部分はこんな

感じかな

霞の回答にますます訳が分からないと2人が首を傾げる。

「えっと、……だから、何なんだろう?」

その様子を見た連が苦笑を浮かべながら説明する。

「それは文字そのままの表の意味です。龍斗がわざわざ置いてったんだから、必ず別の意味があるはずです」

「別の意味?」

「そうそう。東君、長く家を空ける時たまにこうこうの残して行ってたんだよね。で、毎度何か伝言を隠してたから、これもそうだろうなって」

そうして霞と連による解説が始まった。デイビス夫妻は旅亭の仕事をがあるのでここで退席した。

「忍ぶはもしかしたら『傀ぶ』がかかるんじや」

「景色は?……『景色』?」

「後は何があるかな?……」

30分後、仕事が一段落した夫妻は連と霞の所へ向かつた。だが扉を開けた瞬間、中の空気が重くなっていることに気付いた。連は肘をついて頭を抱え、霞は椅子に全体重をかけて天井を仰いでいる。その様子にただならぬものを感じたベラスが声をかける。

「ちょっと、2人ともどうしたの、何か分かったの!?」

ベラスに視線を向けた連は、顔を起こした。

「ん、ああ、ベラスさん。ええ、大体分かりましたよ、奴の言いたいことは

「それで、何だって?」

トマスの質問に脱力した声で霞が答えた。

「『いくら故郷を懐かしんでも、気持ちを押さえよつとしても、自分の気は晴れない。だから俺は渡り鳥の如くここを離れていく。ちよつと面倒事残して行つちまうけど、心配するな。』……全体的に

まとめると そうなるね」

部屋の重い空気がデイビス夫妻を飲み込んだ。驚いた表情のまま固まっている。やはり結構ショックを受けた様子だ。ある程度こうなることを予想していた連はフォローに入つた。

「まあでも、お2人にはちゃんと感謝しますよ。ほら」

テーブルの上に置いてある3枚の金貨を指さす連。

「1泊2食で2000ドルク、1ヶ月30日で6万ドルク。30万ドルクは明らかにおかしい。命を助けてくれた。食住を提供してくれた。それに対するせめてもののお礼のつもりでしょう」

「そんな大金……とても受け取れない……」

「駄目ですよ、ここは受け取るべきですよ」

「そうですよ。それが龍斗に対する礼儀つてもんです」

連も霞もベラスに反論した。そこからは受け取れ、受け取らないの堂々巡り。このままではらちが明かないとトマスがある提案をした。

「えっと、なら4人で山分けにするのはどうだい？ 龍斗君は色々教えてくれた君たちにだつて感謝しているはずだろ。なら、君たちにも受け取る権利はある」

全額はもらえないでの、連や霞にも分配することで額を減らそうとこう考へである。だが連も霞も目を丸くして首を振つた。

『受け取れないですよそんなの！』

こうして立場が入れ替わり、再び堂々巡りとなつてしまつた。いつの間にか日は傾き、窓から入る光がテーブル上の金貨を照らしていた。

最終的にこのお金は、デイビス夫妻が10万ドルク、連と霞はそれぞれ5万ドルクを受け取るということで決着がついた。残つた10万ドルクは教会に寄付することとなつた。

第10話・無常の闇を斬り裂かん（前編）

総合評価10ポイント
お気に入り登録件数5件

いやはや、有難うござります。本当に嬉しい限りです。

第10話・無常の闇を斬り裂かん

鬱蒼と生い茂る緑の中、草一本生えていない一筋の地面が蛇行していた。その道の真ん中に1人の少年が立っていた。鋭い眼光で周囲に目を走らせた少年 龍斗は麻袋をたすき掛けにし、腰を落として構えを取つた。左腰には祖父の形見である脇差が、紐を通して括り付けてある。左手で鞘を固定し、右手で柄^{つか}を逆手になるように軽く握る。そのまま目を閉じ、周囲の気配を探りながら呟く。

「森羅万象、無為自然……『即応の霧』」

忍の世界にはその道を歩む者にしか伝授されない秘伝の技というものがある。それらを総称して「忍術」という。今龍斗が呟いたのはその忍術の一つ『即応の霧』。霧のように意識を広げ、より広範囲の気配を察知するという技である。

しかし木陰や落ち葉の中に隠れる『葉隠の術』、話術によつて相手を翻弄する『五車の術』あたりなら実際に使うことが出来るのだが、口から火を噴くなど攻撃としての『火遁』、蝦^{がま}蟇を呼び出す『幻術』、分身を作り出す『分身の術』など、忍術と呼ばれるものの大半はおよそ人間業とは思えない物ばかり。『即応の霧』も現実的にはあり得ない術の一つと認識されている。しかし気配の察知には精神の統一が必要となる。故に今では短時間で精神統一するためのまじないという認識で『即応の霧』発動の呪文が唱えられる。龍斗が唱えたのも本気で効果発動を信じているからでなく、精神統一の認識からであつた。

迫る気配を探り当てた龍斗は左足に体重をかけ、右足を滑らせて構えを直す。

「無常の闇を切り裂かん……『暁』」

脇差の銘を語り、左手の指で鯉口を切る。その刃が露わになつた瞬間、森の陰から唸り声と共に一匹の犬が現れた。大きな犬歯をむき出しにし、尻尾を立てて龍斗を威嚇するその姿は、遠目に見てもかなりの大型であることが分かる。その膂力も並大抵ではない。一瞬身を屈めたかと思うと、次の瞬間には龍斗の喉を噛み千切らんと彼の身長よりも高く跳躍する。

（やはり狙いは喉笛か、甘いな）

龍斗が野犬と戦うのはこれが初めてではない。玲角島にいた時、忍の修行の一環として山籠もりをしたことがある。それは大陸の言葉で言えばサバイバルと呼ばれるもので、人里離れた山の中たつた1人で1ヶ月間、自給自足で生き延びねばならない過酷なものだった。その修行によつて野生動物との戦い方や自然の中で生きる術、薬草の知識などを学ぶのである。

野犬は短期決着を好む。跳躍して上から攻撃すれば相手の視線もそれを追うために顔が動く。顔が上を向けばどうなるか。狙いである急所の喉笛が無防備に晒されるのだ。

だがこの戦法には1つ弱点があつた。

龍斗は体重を右足に移動させ、右腕を斜め上へと振り上げた。逆手に握られた脇差の刃が、戦法の弱点 無防備となつた野犬の腹に突き刺さる。勢いそのままに腕を振り切ると、野犬は自重によって刃から抜け落ち、地面に叩きつけられた。腹から赤い血を溢れさせ、血だまりを広げながらもなお立ち上がろうとする野犬の首筋に脇差を当て、龍斗はその喉笛を引き裂いた。

（さて、あと何匹だ）

動かぬ死体となつた野犬から目を離し、辺りを見回す龍斗。その顔には、その目には人間らしい情など欠片もない。命を奪うこと慣れ、殺すことには何の躊躇ためらいもない殺戮者さつりくしゃの目である。だがそれは同時に、相手にやられて自分が命を失う覚悟がある、ということも意味している。

『忍たるもの、生死あらば情を断つべし』

やはり龍斗には忍の教えが染みついているのだ。そして忍である以上、一切の油断は禁物。野犬が単独で動いているというのは樂観的すぎる思考である。少なくとも五、六匹、多い時には数十匹という単位の群れを形成しているはずなのだ。

複数の気配が迫るのを感じ取った龍斗は腰を落として構え直し、脇差『暁』を握る手に力を入れた。

「ふう、終わったか」

血だまりに沈む10匹の野犬を見ながら龍斗が言つた。気配を探つてもこちらに向かってくるものはない。着物と違い、大陸の服は肌に密着する作りであるために体がどれだけ動かせるか不安だったが、実際戦闘をしても問題はなかつた。龍斗は足を曲げ、野犬の顔に近付いた。

（これが、ハウンドドッグか……確かに上顎の歯2本を取るんだつか）

龍斗はオリジアを出るにあたつて1つの任務を受けていた。その内容は、ハウンドドッグ及びワイルドボアの討伐。次の街に行くために必ず通らなければならないこのアサンの森でのクエストだったので、ついでに受けたものである。

討伐系のクエストを受けた際は、対象を仕留めたという物的証拠が必要となる。何を何体倒したか、その証明のために対象の体の一部を持ち帰るのだ。ただ持ち帰ればいいというものではない。ギルドが指定した特定部位を持ち帰ることで初めて討伐完了となる。今回討伐対象となつている2種の特定部位は歯。なので龍斗はその部位を回収する作業に入った。他の歯より幾分大きい犬歯の上に脇差の刃を突き刺し、歯茎から抉り取つた。

残り9体のハウンドドッグからも歯を回収すると、龍斗は死体の前足を両手で掴み、森の中へと投げ捨てた。野生の肉食動物は死肉

を食らうものが多い。人が通る道路のど真ん中に放つておけば、その肉を食らうために本来道路まで出てこないはずの野生動物が道路に出てきてしまう。そうなれば通行の邪魔どころの話ではない。なのでギルドの規則として道路上に死体を残さないことが定められている。道路上にさえ残さなければ後はどう処分しても構わないとのことだったので、龍斗は文字通り、好きなように放り投げたのだった。

死体を処理した後、龍斗は地面に耳をつけた。こうすることで近くに川があるかどうかを探ることが出来る。幸いにもすぐ近くにありそうだったので、龍斗は森の中へと入つていった。途中で自分が放り投げたハウンドドッグの死体を1つ見つけた。龍斗は再び横に放り投げ、更に進んで川に出た。

着いてみると川というよりは小さな清流であった。しかし龍斗にとってはそれで十分だった。回収したハウンドドッグの牙を1本1本水にさらし、脇差を使って歯茎の肉をそぎ落としていく。血や肉は時間の経過と共に腐敗が進み異臭を放つ。大抵の冒険者は気にせずそのままにする。ギルドとしても部位の回収さえできればそれでいいので、特に気にすることはないというのだが、龍斗は道中で悪臭が移るのを嫌つた。

20本の牙を全て洗浄し、オーリジアで買つた2つ田の麻袋に詰め込んだ。

（さて、そろそろ戻つて進みますかねえ）

そう思つて歩き出したその時、遠くで派手な破壊音が響いた。

第10話・無常の闇を斬り裂かん（後書き）

今更ですが……『』のタイトルのつけ方どうなんだろう
いいのかなこれで…？

忍術についてですが『即応の霧』は自分で考えだしたオリジナルの
技です。実際にはそんな技ないです。

（何なんだ、さつきの派手な音は）

龍斗は木々を飛び移りながら走っていた。地上を走るのは様々な野生動物に遭遇する可能性があるために危険である。この辺りに生息する動物は木の上に登ることはないので、これが最も安全な移動経路ということになる。

（そういやさつきの俺みたいに路上でも襲われることがあるんだよな。ところことは、馬車か何かが森の中に突き飛ばされた可能性が高いな）

「其の速きこと風の如し……つっても変わらねえか。もうちょい足速くならんものかね」

1人悪態をつく龍斗だが、その声に応えるものは誰もいない。焦る気持ちを押さえながら龍斗は森を突っ切つていった。

「あー、やつぱりな……」

音の発生源を見つけた龍斗は、木の上からその様子を眺めていた。案の定、そこには道路から突き飛ばされた馬車が1台転がっていた。恐らく馬車をそのようにした張本人、ワイルドボア数体が取り囲み、自慢の長い牙を以て馬車を大きく揺すっていた。馬車を引いていた馬は既に息絶え、巨体の猪^{いのしし}がその肉を食らい始めていた。

暫く観察していた龍斗はあることに気付いた。耳を澄ましてみると、馬車が揺れる度に人間のうめき声が聞こえた。中にまだ人がいる。

（さて、体長は1メートル程のが3体か。『暁』……じゃあ時間がかかるな。ならここは……）

龍斗は左手を背中に回した。麻袋と同じように、左肩から右腰へとたすき掛けした太刀の鞘を掴む。

「父さん、頼むぜ。……早霧の山に茜差す、『東雲』！」

父の形見である太刀『東雲』の刀身を露わにすると木から飛び降り、着地と同時に横薙ぎの一撃を放つた。それはすぐ傍にいたワイルドボアの前足を斬つたため、相手はバランスを保てず横倒しになる。隙だらけになつたその首筋に刃を当てる、躊躇いなく刀を引いて血しぶきを上げさせる。次の瞬間、気配を察知した龍斗は後ろに転がつた。体制を直して見ると、赤く染まつた猪に進路を阻まれた別の猪の姿があつた。

（ちつ、俺としたことが……気配捉えるの忘れてたな。だから俺はまだまだなんだ）

かすつた左腕の痛みに顔を歪めながら自身に悪態をつく龍斗。だが今はそれどころではない。瞬きで気持ちを切り替え、太刀を両手で構え直す。

「森羅万象、無為自然、『即応の霧』」

そう呟き、今度は敵の気配を逃すまいと意識を全体に向ける。先程避けたワイルドボアがこちらに突進しようと動いた瞬間、龍斗は数歩分横跳びし、馬を食らう1体に向かって走り出す。こちらに気付いた猪は顔を振り、龍斗を弾こうとするが空振りに終わつた。猪の背に飛び乗り、両耳の間に太刀を突き刺す。

だがその後のことを考えていなかつた。猪が派手に暴れ出したため、太刀を抜くことも降りることも出来なくなつた。両足で胴体をはさみ、太刀を握つて振り落とされないようにしがみつく。流石にこの状態から普通に飛び降りれば無事では済まない。形見の太刀を見捨てる気は毛頭ない。暴れる反動を利用してしつつ何とか片足を背中に上げた龍斗。太刀を握る手の力を強め無理矢理空けた手で脇差を抜く。

ワイルドボアが飛び上がり、後ろ足2本で直立するような格好になつた。好機とばかりに龍斗は後ろ足の1つから鮮血を上げさせる。全体重がかかっている足が脱力しバランスが崩れる。その瞬間に龍斗は太刀を手放し、飛び下りた。倒れてもなお足をばたつかせる猪

に背中側から近付き、体当たりを受けないようにしながら首や腹を滅多刺しにする。やがて動きが小さくなり、ぴくぴくと痙攣けいれんするだけとなつた。頃合いと判断し、脇差を直した龍斗はワイルドボアから太刀を引き抜いた。血糊を振り払いながら気配を探る。

（もう1匹いたはずだが……まあいい）

太刀『東雲』を鞘に納め、龍斗は馬車を確認した。ワイルドボアの牙にやられ所々布が破れている。車輪は大破しているし木枠にもひびがある。馬車としては使い物にならないだろう。

（それでも中に侵入できるようなところはないな。ひとまずは無事か）

見当をつけた龍斗は馬の血に濡れた横向きの御者台から中に入つた。

第1-1話：無常の闇を斬り裂かん 2（後書き）

今までに比べると文量少ないかな。いつもは2000字越えなんですが。今回は1600ほどかな。別に意図しての事でないので特に気にしていませんが。

「誰かー、生きてるか?」

声を掛けながら龍斗は馬車の中に入った。中の様子を見た瞬間、龍斗は目を見張った。馬車の中には男3人、女2人、計5人の人間がいた。だがそこには生氣というものがまるで感じられない。薄汚れた白い服に身を包んだ一同はこうべを垂れて座り込んでいた。不安、絶望、諦念……龍斗に感じ取れたのはそんな負の感情だけだった。

その空氣を作り出している要因の1人、最も御者台に近い位置にいた男が龍斗に気付き顔を上げた。

「……おや、どちら様ですか？　見たところ、冒険者とお見受けしますが」

男は目を細めた。薄暗い馬車の中に長時間閉じ込められていたため、龍斗の後ろから射す光が眩しいのだ。龍斗は光を受けるその顔に目を向けた。黒髪、黒目と大和人のような特徴を持つているが、それにしては肌色が白すぎる。冒険者、という言葉に眉を顰めるも、龍斗は渋々肯定する。

「ん……まあ、その通りだが。そういうあんたは大和人、てわけでもなさそうだな」

「ええ、仰る通り私は大和人ではありません。貴方は……いや、止めておきましょう。今は悠長にしている場合ではありませんしね」（何だこの落ち着き払った態度は？　他の4人も、今の状況分かってるのか？）

男が言う通り、今は悠長にしている場合ではない。道路上ならまだしもここは森のど真ん中だから。しかし馬車の中にいる5人には慌てる素振りが無い。話しかけてきた男以外は俯いていただけだった。男の顔も無表情、何処か達観したようにも見える。

「では冒険者さん、我々に構わず早くお逃げなさい。いつまた獣が

襲つてくるか分かりません故

「は？」

龍斗も同じ結論に達していた。それ故に男の発言が信じ難く即答で反応してしまった。訳の分からぬ龍斗は問いかける。

「何故だ？ 何故それが分かつて見捨てろと？」

「我々が『奴隸』だからですよ」

遮つた男の言葉は非常に衝撃的だった。龍斗は驚きを隠しきれず、同時に歯を食いしばつた。無意識のうちに力が入り、握り拳が小刻みに震えている。

「……奴隸……人を人とも思わぬ極悪非道……！…」

奴隸とは言わずもがな、他人に所有される立場の人間のことである。島国大和では、国の成立と共に単なる商売目的の人身売買は禁止されている。例外として大飢饉などの災害時、他にどうしようもなく娘を遊郭に、という2つの場合に限り人身売買が認められるが、それ以外で行つた場合は厳しい拷問にかけられる。余談になるが、大和では殺人は重罪。正当防衛が認められない限り罪人は極刑即ち死刑。大和において命とは非常に重い物なのだ。

だが海を渡つたこちら側、ランドレイク大陸ではその常識は当てはまらない。こちらの世界では人身売買は当たり前のように行われている。殺人を犯した者が死刑になることもない。森の中で野獣に殺されたと嘘を言えればあっさり認められてしまうからだ。初めてそれを知らされた時、龍斗は今と同じように怒りを表したものだった。滅多に感情を表に出さない龍斗にしては珍しいことで、連や霞でさえ驚いたくらいだ。その時と同じように怒りを晒し、また同じようなことを思う龍斗。

（畜生が、人の命を何だと思つて　）

だがその思考は突然起こつた地震によつてかき消された。たたらを踏むも何とか倒れ込むのを防ぐ。

(いや、地震じゃない。馬車が揺れてるのか……！……まさか……)

耳を澄まし、荒い息遣いを聞いた龍斗は確信した。

「また来たか野獣共。お前ら、本当に死ぬ気か？」

「死にたくはないが呪いのせいで全く動けねえんだよ。主の命令無しに動きまわれねえ。奴隸つてのはそういうもんだ」

金髪の男が両手を上げる。その手首には他の4人と同じ黒革の手枷が付けられていた。重さで垂れる鎖を見て龍斗は苦い顔をした。

「解放しなきゃ動けない、か……ここまで来て見捨てるつてのか……？」

「まさか我々を助けるおつもりで？」

「当たり前だ。こっちじゃどうか知らんが人の命はそいつに捨てられるもんじゃねえ。全員助け出す」

ほう、と黒髪の男が声を上げた。そして龍斗に一つの提案をする。

「そこまで仰るのなら一つだけ手があります。我々と契約して頂けますか」

「契約？」

龍斗は男の黒田を見た。相変わらずの無表情だが目に光が戻つているように見える。

「ええ……皆さんも、ただ死を待つよりかはマシでしょう」

男の言葉に皆同意した。どうやらその契約というものをよつて、少なくとも動くことが出来るようになるらしい。全員の意思を確認した龍斗は男に聞く。

「で、何をすればいい」

「本来なら法的手続きがあるのですが、形式上の事なので必要ないでしょう。簡単なことです。貴方の血をこの手枷につけて下さい。それで契約完了です」

「血、か」

龍斗は脇差『暁』を抜くと、左小指に切先を当てた。少し力を入れ、皮膚を破る。痛みに一瞬顔をしかめたが、血が滲み始めたのを見ると刃を鞘に納めた。

その血を男の手枷、手首に巻かれた革の部分につける。すると、手枷全体が淡く光を放ち、その光と共に鎖の部分が消えていった。それに目を見張りつつ他の4人の手枷にも血をつけていく。5人全員の鎖が解かれたところで、龍斗が呟く。

「さて、鎖を外したはいいが……」

馬車は相変わらず揺らされている。心なしかさつきよりも激しさを増しているように感じられる。

「2～3体じや済まないよな……」

「ようしければ、我々をお使い下さい」

3人の中では最も背が低い黒髪の男がそう言つた。龍斗が見ると、解放した男3人が直立不動で立つていた。龍斗は3人に尋ねた。

「戦闘経験は？」

「俺は元々冒険者やつてたんだ。ワイルドボア如きには負けない腕がある」

と金髪の男。馬車の中で最も背が高く筋肉質でガタイがいい。「折角助けてもらつたんだ。恩を返したい」

と燃えるような赤い髪の男。

「フフフ、私達は元々戦奴隸……戦闘の道具として売られましたので、皆腕に覚えのある者ばかりですよ」

と黒髪黒目の男。龍斗は更に質問する。

「得物は？ 縛らなんでも素手は無理だらう」

「確かにそうだが、そんなこと言つてる場合じゃないだらう」

金髪の男がそう言つと、その前にいた黒髪の男が鼻で笑つた。

「まあ貴方のように馬鹿力があるなら武器が無くても立派に戦えそうですが……」

「何だと……」

「『安心ください。あの商人、我々と一緒に武器の類も載せていましたので。使い慣れた得物ではありますんが、これも無いよりはマシでしょう』」

よく見ると馬車の奥に大きな箱があつた。龍斗が開けて中を見る

と、細身の片手剣や斧などが入っていた。

「よし、それぞれ得物を持つたら一斉に出る。死に物狂いで戦うしかないと……死にたくなけりや、な」

その言葉を肯定し、それぞれ武器を手に取った。

第1-3話・無常の闇を斬り裂かん 4（前書き）

このタイトルいつまで続くんだろう。予想以上に展開が進まないのですよ。内容的に大丈夫かなと思ってこのままで……

何はともあれ、第1-3話です。

「おい、あつたぞ。ここだ」

「ちょ、ちょっと待つてくださいよベリスさん」

レザーアーマーを着た4人が息を切らし木に手をつきながらやつてきた。その視線の先には緑色のバンダナを頭に巻いた無精ひげの男が手招きをしている。

「馬鹿が、静かにせんか！！ 気付かれたらまずいだろうが！！」

例のバンダナの男、ベリスは語氣を荒げながらも小声で怒鳴るという非常に器用な真似をやつてのけた。視線を戻すと3人の男達がワイルドボアの群れと戦っているのが見える。

「あいつらに見つかって命を落としてえか」

赤髪の男は剣で的確に急所を突いているし、黒髪の男は動きが速く目で追つのがやつとといったところ。金髪の大柄な男など、明らか両手武器と思われるサイズのバトルアックスを片手でぶんぶん振り回している。その様子を見た4人は青ざめた顔で首を横に振った。「分かつてるじゃねえか。うちの盗賊団に命知らずの馬鹿は要らねえからな。さて、とつとと済ませるぞ。収穫なしじゃあデツツの兄貴に何されるか分からんからな」

ベリス一行はこのアサンの森を縄張りとして活動する盗賊団の一員、主に道路を通行する旅人や商人の馬車に襲撃し、奪つたものを売り払うことで荒稼ぎしている連中である。だが実際のところそのやり方には大きなリスクが伴う。他でもない冒険者の存在である。冒険者と一口に言つてもその仕事の幅は広い。野獣の討伐、遺跡探索、傭兵といったスタンダードな仕事の他に、配達や馬車の護衛といった仕事も請け負う何でも屋のような一面を持っているのだ。そして冒険者は強い。複数人で取り囲めば何とかなることが多いが、

1人1人の力量となると冒険者の方がまず格上であると思つていい。故に彼らは安直な浅慮で人を襲うことはない。機会があれば野獸に襲われた馬車からめぼしい物を奪うという手段を使う方がセオリーとなつてゐるのだ。

横倒しになつてゐる馬車の裏手に隠れると、ベリスは腰からジャックナイフを取り出した。刃を幌に押し付け、一気に切り裂く。

「お、こいつあ……」

ベリス一同は目を見張つた。中にいたのは2人の少女。10代中盤と思われる金髪の2人は怪訝な表情を浮かべているがそれを抜きにしても端正で綺麗な顔をしていた。ねめつけるような視線で、ベリスはその全身をくまなくチェックしていく。

（服のせいで詳しく述べ分からんが、出るところは出でているな……おまけに顔がいい。それに手の黒革……奴隸がつけてる呪いのアイテム『拘束の手枷』か）

「こいつあ上玉だ。おい、2人1組で担ぎ出せ」

「イエッサー！！」

言つうが早いが4人の盗賊は馬車へと乗り込み、2人がかりで1人を肩に担ぎ、外へと運び出す。

「ククク、今夜は楽しめそうだなあおい

飢えた獸のような目で下卑た笑いを浮かべたその時だつた。

「何をしている」

突然のことに身を震わせ硬直した。が、ベリスは他の4人と違ひすぐさま声の主へと顔を向けていた。そこにいたのは少女たちと同年代と思われる黒髪の少年。

（何だ、ガキか）

気を軽くしたベリスは4人に命令した。

「とつととテツツ兄貴のアジトへ持つてけ！！ 直ぐ片付けて追いつくからよ

「は、はいっ」

「待て！！」

「おつと、行かせねえぞ」

ベリスは少年の行く手を遮った。右手のジャックナイフを目の前に突き付け、薄笑いを浮かべて少年に告げる。

「見たところ駆け出しの冒険者か何かか？ あいつらの事なら諦めな。俺らでしつかりその体を楽しんでやるからよ」

その言葉を聞いた途端、少年の顔から表情が消えた。対照的にベリスは下卑た笑みを強めていく。

「ははっ、何だその顔は。気でもあつたか？ まあ何でもいい。お前がここで死んだって、野獣にやられたことにしかならねえよ」

「1つだけ聞く。お前らは盗賊だな？」

「あ？ だつたら何だ？ あれか？ 怖くなつたか。ええ、坊ちゃん？」

少年は腰に挿していた黒光りする棒に手を掛けた。右手が上がると、見慣れない形の刃を持つ短剣が現れた。ベリスに多少の緊張が走るが表情は笑みを浮かべたままだ。

（まあどうつてことはない。所詮駆け出しのガキだ）

「何だよ、自棄になつたかお前」

「『俺が死んでも野獣にやられただけ』……そう言つてたな

「ああそうだな、命知らずのお前にや似合いの死に様だ」

「その言葉、そつくりそのままお返しする」

ベリスの表情が一瞬で消えた。直後、その顔に青筋が立ち、歯ぎしりと共にナイフの切つ先がぶれ始める。

「ガキが……なめやがって！！」

怒り心頭のベリスはナイフで斬りかかった。だがその刃が少年に当たることはなく、力任せに振ったため体制が前に崩れていく。その瞬間、ベリスの視野の片端で何かが動いた。同時に首筋から何か冷たいものが走つてゆく感覚が出てきた。攻撃が当たらなかつたことに驚きながら何かの方へと顔を動かす。だが思ったように体が動

かず、非常にゆっくりとしか首が回らない。まるで時間の流れが遅くなつたような感覚である。ベリスは内心苛立つていた。

（くそ、何が起きた！？ 何が動いた！？ 速く動けよ俺の体だろ！…）

ようやく視界がその何かを捉えた。そこには先程まで自分の目の前にいた はずの黒髪の少年。無意識のうちに目が合つた。
(何だ、あの目は。デツツ兄貴と同じ、人を人とも見ないような…いや、そんなもん比ぢやねえ、もつと冷酷な、そう、殺すことにな慣れきつた、命を奪うことに何の躊躇いもないような… 何だあの短剣、あんな赤い色してたか……いやまさか)

その刹那、ベリスの視界は真つ赤に染まり、もう2度と元に戻ることはなかつた。

「ああ、最悪だ」

頸動脈から鮮血を上げるベリスを見下しながら少年 龍斗が腕を振つた。血糊を落とし、脇差『暁』を鞘に納めたちょうどその時、男3人が龍斗の元へ集まつた。血の池に沈んだ男を見てぎょっとする2人。

「如何なされましたか」

唯一平静を保つてゐる黒髪の男が龍斗に問う。龍斗は頭を搔きながら苦い表情で答えた。

「盗賊だ。あと4人、2人1組で馬車の中にいた女2人を連れ去つちまつた」

流石の黒髪もこれには驚いた。金髪がすかさず発言した。

「なつ……けどよ、おかしくねえか？ 拘束の手枷はあんたとの契約で外されたる。声の1つでも上げればいいんじや」

「……しました、私としたことが……」

台詞の途中で黒髪の男が声を上げた。その顔は龍斗と同じ、苦虫をかみつぶしたような表情。

「何か知ってるのか」

「ええ、すっかり失念しておりました……女性奴隸の自由を奪っているのは拘束の手枷だけではありません。『束縛の呪い』もあるのですよ」

「呪いだと？」

「はい、奴隸の自由を奪う道具、呪いは一つだけではありません」

「何故2重に？」

「簡単なことですよ。……女性奴隸は性奴隸としての需要もありますから」

第1-3話・無常の闇を斬り裂かん 4（後書き）

主人公側からの描写が難しかつたので相手側にしてみたらすんなりかけたという

「性奴隸……ちつ」

龍斗は舌打ちした。赤髪の男が龍斗に問う。
「で、どうしますか、迫りますか？ それとも……見捨てますか？」

言葉を詰まらせたのは敬語に直すため。内容自体は悪い話ではない。この場から無事に立ち去ることを考えるならそれが最善の策である。

「なつ、それは

「それは無い。俺は追うぞ」

黒髪の男を遮って龍斗が断言した。その言葉に安堵した様子の男だつたが、ふと思いついて龍斗に問う。

「理由を伺つても？」

龍斗は男3人を見渡しながら言つた。

「俺は『全員助け出す』と言つたはずだ。『必ずから約しき盟を破ることなかれ』言つた以上は実行する。それだけだ。文句がある奴は来なくともいい」

龍斗の意氣を感じてか2人が気圧されたように体をのけ反らせる。だがそれに屈しない者もいた。黒髪黒目の中である。

「フフフ、何と義理堅い。ま、我々は奴隸の身。主の命に従うだけです」

そう言つて何故か片手を頭にかざす。だが一瞬眉を顰めて直ぐに腕を下ろした。

「何でもいい。取り敢えず奴らの気配を探つて見つけ出さないと。森羅万象、無為自然、『即応の霧』」

龍斗は4人が走り去つていつた方角を向いて意識を集中させた。声をかけた時に感じていた気配を探ると、指先ほどの点を感じた。

「ちょっと遠いか？ でも動き回つてはいけない……まっすぐ行けば

良いかもだが、急がないとやばいな。普通に走つて間に合つかどうか

「それはまずいですね……ふむ、私に一つ考えがあります。お任せ願えますか?」

「策があるのか? なら任せる」

龍斗からその言葉を聞いた黒髪の男は片手を頭に口を歪めた。

フエアウイング

「では……風の精霊シルフよ、我らに力を、『追い風』」

途端に龍斗は風を感じた。それは自然の風とは違う、質量を持つて纏わりつくような風である。そしてそれは驚くべき効果を龍斗にもたらす。

「凄いな、体が軽く感じる」

「お前、ただもんじやねえとは思つてたが……」

「まさか魔法が使えるとは……」

他の2人も感嘆の声を上げた。だが黒い目はもう笑つていなかつた。鋭い眼差しで3人を諫める。

「感心している場合ではありませんよ。それに効果は一時のもの。お急ぎになつた方がよろしいかと」

「おつとそうだった。じゃあ行くぞ……其の速さ」と風の如し、『疾走』

龍斗はいつもの癖で忍術の文句を呴き、気配の方へと駆け出した。

「……今は……」

「ああ……」

「フフフ、さて、急がなければ取り残されますよ

あつけにとられている2人を尻目に黒髪の男が龍斗を追つ。

「あ、ま、待てよ!!」

正気に戻つた2人もその後に続いた。

「ハア、ハア……お、追いついた……」

「な、なんてスピード……」

「しつ、静かに」

たつた一言で金髪、赤髪が一気に黙つた。それには一瞥もくれず龍斗は前方にある洞窟を見続ける。山肌にポツンとあるその入口には2人の見張りが立つていた。それを見た金髪の大男が囁くような声で言つ。

「あそこか……あの程度ならすぐ倒せるな」

「あれだけならな。どう考へても中に親玉がいるだろ?」

その声を聞いた元冒険者という赤髪の男があ、と声を上げる。

「この辺で盗賊なら、デツツ辺りじやない、ですかね、その親玉」

「どんな奴だ?」

「ぶつちやけ単純な奴ですよ。欲に忠実で深く考へることはない。元々はそれなりに力のある冒険者だつたとか。いつの間にか10何人程のチンピラを従えて盗賊になつちましたが」

「ならば、如何いたしましょうか」

龍斗は黒目に見据えられしばし沈黙した。

天然の鍾乳洞に少し手を加えただけの洞窟の中。その最奥へと1人の若者が歩いていった。濃い緑色のバンダナに茶色のシャツ、革製の胸当て　レザーアーマーというその格好は、見張りをしていた内の1人のものである。目的の場所には洞窟の端から端まで毛皮が敷かれている。壁際に並ぶのは、恐らく今までの盗賊稼業で得た物の中から選りすぐつたのだろう、一目見ただけでも良質と分かる品々が並んでいた。

その中心に7人の人間がいた。2人は女性。顔を見る限り10代くらいで、両手には黒い革を巻いている。残り5人はすべて男性だつた。床に転がされた女性を下卑た目でねめつけ、着衣の上から体を触りまくつている。その中心にいる大柄の男に若者は声をかけた。

「お頭!!　お楽しみの所失礼ですが、1つ報告が」

「ああ?　何だよ人が楽しんでる時に!!」

「おい、デツツさんを怒らせるなよ。命が惜しいだろ」

今まさにズボンのベルトを外そうとしていたデツツは若者を睨んだ。伸びた無精ひげに涎をつけているが、その目は野獣のように荒々しい。しかし若者は威に屈さず言葉を返す。

「洞窟が冒険者に見つかりました。現在入口で交戦中です」

その言葉に全員の目が大きくなる。しかしそこは元冒険者という経験故か、立ち直りの早かつたデツツがすぐに状況説明を求めた。

「それで、どうなつてんだ」

「取り敢えずその辺にいた仲間達を応援に行かせました。1人は潰しましたが、あと3人と交戦中で予断を許さない状況かと」

デツツの顔に焦りが見えた。

（俺は盗賊になつて日が長い。とうくに賞金首になつてておかしくないな……）

「取り敢えず、相手は3人だな？」

「はい」

「なら12人で一斉に行け！！！ 念のため俺も行く。最悪それまでの時間稼ぎだ！！！」

「あ、それなら良いものがありますぜ」

若者が取り出したのは一本の黒光りする棒だった。それを見た女性2人の顔色が変わるが、誰一人気付いた様子はない。

「潰した1人が持つてた武器です。かなり良いものみたいですよ」

そう言いながら若者は棒を両手に持ち、左手を動かした。現れた刃を見てデツツは驚愕した。

「こりやすげえ、なんて綺麗な刃だ……だがこいつあお飾りのなまくら剣じゃねえのか？」

「いや、飾りじゃありませんよ？ 実際戦闘で使いますし、何より切れ味が抜群で」

デツツの目の色が変わった。武器として優れているという情報は彼にとって何よりも重要なことだからだ。デツツは若者が持つ短剣を受け取ろうと腕を伸ばした。良いものが手に入るという先走った

気持ちから思わず顔がにやけてしまつ。

「……ほつ、どれだけすごいんだ、その切れ味は？」

「それは……こんだけだよ」

刹那、若者はその手首を斬りつけ、踏み込むと同時に手首を返して首筋を斬つた。あまりに突然のことだったので、デツツが倒れた後も沈黙が続いた。血が広がり、若者が左胸に止めの一撃を刺す頃ようやくその沈黙が解けた。

「デ、デツツさん！！」

「嘘だろ……」

「まさか、こ、じゃ最強なのに……」

「さてと」

動搖を隠せない他の面々を他所に若者はバンダナを投げ捨てた。バンダナの影に隠れていた黒髪が露わになり、血糊を振り落とすと、藍色の鋭い目が残る男共を睨みつける。

「さて……こいつより腕のある奴はいないか。その命をかける覚悟あらば、お相手致す」

第14話・無常の闇を斬り裂かん 5（後書き）

んー…… まともな戦闘がないへへ；

野獣と不意打ちかあ

まともな戦闘の場はちゃんと考えてあります。でも全然たどり着けない

ポイント入れて下さる方、お気に入りに入れて下さった方、本当に有難うござります。

至らない点などあるかと思いますが、頑張って書いていきますのでよろしくお願ひします。何かありましたら感想など頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0606y/>

龍の逆鱗

2011年11月27日23時03分発行